



Title	《生きにくさ》のケアへ
Author(s)	川本, 隆史
Citation	臨床哲学ニューズレター. 1998, 2, p. 55-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81741
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〔Ⅲ 臨床哲学シンポジウムの報告から〕

テーマ「ケアの哲学的問題」

《生きにくさ》のケアへ

川本隆史

「生きにくさ」とウェーバー『職業としての学問』 「生きにくさ」は私の新造語ではありません。竹田青嗣さんの文章で初めてお目にかかったような記憶がありますが、今はむしろ一種の「時代精神」を表現している用語ではないかと思うようになりました。実はこれ、私にインタビューを依頼してきた『世界』という雑誌の編集部とのやり取りのなかで浮上してきたのです。編集部から特集タイトルに《コミュニケーション不全列島日本》を予定していることを教えられた私は、猛反発しました。このような日本社会全体を診断するようなアプローチに私はのりたくない。社会学用語で「予言の自己成就」というのがありますけど、社会の隅々までコミュニケーション不全という病理が行き渡っているぞと煽り立てる言説が、ますますミクロなレベルでのディスコミュニケーションを昂進する危険性に自覚的であらねばならないと考えているからです。

予告どおりこのインタビュー（「居場所」は必ず見つけられる）『世界』1997年3月号冒頭では、「オウム真理教に惹かれる若者をどう捉えればいいのか」と斬り込まれました。もちろん「オウム現象」と総括される傾向にどんな対策を採るべきなのかといった語り口は用いたくありません。それよりも私が実際に若い人たちと向かい合って伝えられたこと、こちらから伝えたいことをしゃべるという姿勢を保ちたかったのです。そこでこんな戦略（？）を選びました。つまり一連のオウム事件に直接言及するのではなく、マックス・ウェーバーの『職業としての学問』での現代文化論および「アダルト・チルドレン」という二つの視座から、現代社会の「生きにくさ」の由来を考察してみるというやり方です。

まずウェーバーから入ります。この講演が行なわれた第一次世界大戦後のドイツでは、旧来の学問・教育のあり方に疑問を抱いた若者たちがしきりに「体験」とか「全人格的なものへの帰依」を追い求めていたそうです。まさしく戦後ドイツ社会の「生きにくさ」をどう突破するかという切実な願いが込められていたのでしょう。そうした学生サイドから沸き上がった期待の高まりのなかで『職業としての学問』

の講演が行われ、「神々の争い」や「魔術からの世界解放」といった名セリフが語られたわけです。そこでのウェーバーのラストメッセージを噛み砕いてパラフレーズすると、「さまざまな価値が対立している《生きにくい》時代の運命に堪えること。生きにくいからといって何もしないで、自分たちのことをグイグイ引っ張ってくれる予言者や救い主を待ち焦がれるだけではだめだ。自分の仕事にきちんと向かい合い、時代が求めている日々の課題に取り組もう」というふうになるのでしょうか。これがオウムの若者たちを分析するときの補助線の一つになると思います。

アダルト・チルドレン 「アダルト・チルドレン」（以下 AC）というのは、1970年代のアメリカにおいて、アルコール依存症の患者を治療する現場で編み出された言葉でして、医学の権威をバックにした症例・病名ではなく、あくまでも自分たちの《生きにくさ》の由来を探るなかで徐々に使われるようになった「自己定義」の用語です。この点にまず注意を促したいと思います。つまり AC とはトップダウン式に押し付けられた名称ではなく、実際に困難を抱えた人たちのネットワーキングがボトムアップ式に生み出した言葉に他なりません。具体的には家族関係がうまく機能しない家庭で育った人々が、ニーチェのいう「ルサンチマン」を内攻させてしまい、表面上いい子を演じるだけになってしまう、そんなつらい状態のこと。AC の家庭は往々にしてこれまた表向きは「いい家庭」なのですが、そのことによってかえって当人が家庭で息をつける場所をなくしてしまい、AC に追い込まれていくという心的メカニズムが想定されています。私のインタビューと同じ号に掲載された西山明さんのルポ「帰る場所がない」の主人公あかりさん(仮名)も、偶然 AC という表現を知って自分の抱えていた問題がはっきりしてきたそうです。

最初私は、AC を1970年代にもてはやされた「モラトリアム人間」をアップ・トゥー・デートにただけじゃないかと勘ぐっていたのですが、だんだん両者の相違が分かってきました。「モラトリアム人間」の場合だと、一人前になるのを社会の方が待っていて、「その間に色々と冒険をしろ」、「本当の自分とそれが忠誠を尽くせる対象を探せ」という処方箋——ウェーバー流に言うところ「各自の人生を操っているダイモンを見つけ、その声に聴き従え」——で何とかしのぐことができます。しかし1990年代の《生きにくさ》は、どうも「モラトリアム人間」では説明がつかないほど深刻になっているようです。そこで突破口となるのが AC です。

AC 関連の文献を読むと、「生きにくさ」とセットで「居場所がない」という訴えがよくでてきます。ここで私はあえて楽観論を打ち出して、「社会に居場所がな

い」というのをひっくり返した上で、「私の居場所こそ社会だ」と再定義してみたいのです。じゃあ「社会」とは何かということですが、その原語である「ソサエティ」という奴も元々は西洋の人々の《生きにくさ》を基底にもっていることが分かります。英語の語源はラテン語「ソキウス」（仲間）なのですが、14世紀頃から「ソサエティ」という単語が使われるようになりました。現在残っている古い用法だと、「共通の豊かさ」を意味するケースとか「ソサエティおよびシヴィル・カンバセーション（市民的礼節を備えた会話・交際）の諸法則」といった言い回しが三十年戦争の頃（1642年）に出てきます。そうしてヨーロッパ中を戦乱に巻き込んだ宗教戦争の痛苦な経験を通して「ステイト」（国家）と「ソサエティ」（社会）の対立が成立します。この場合「ソサエティ」は自由民の連合で、「ステイト」はヒエラルキー（階層秩序）と統治権を備えた権力組織です。現実の生活においては国家や教会の監視の下で人々は息苦しい暮らしを強いられていたわけですが、だからこそ民族や宗教の違いを越えて市民同士が安心してつきあえる場所として、「シヴィル・ソサエティ」が求められたのでしょう。そうした「社会」の《原初的条件》（藤田省三）に立ち返って、《生きにくさ》の痛覚をバネにして、「居場所」としての社会を自分の言葉で定義できるようになっているのではないのでしょうか。西山さんのルポに引用されているあかりさんのノートの中に「社会は私たちが思っていたほど狭く、画一的ではない」と記されていますが、まさしく彼女は均質、画一的でなく、出入りも自由な空間、「居場所」として「社会」を再発見したわけなのです。

フェミニストセラピー　ところが実際、日本の社会はいま非常に画一化されてしまっているとの診断が下されることが多い。精神史家の藤田省三さんはそうした日本社会の画一主義を「「安楽」への全体主義」と名づけた上で、そこに風穴をあける方向性を示唆しています。これを私なりに言い換えると、各自の《生きにくさ》を出発点において、日常的な生活を見直していく、という手順です。その具体的な進め方のヒントを「フェミニストセラピー」という心理療法から教えられました。これは第二波フェミニズムを支えた「コンシャスネス・レイジング」（意識高揚）という話し合いの方法論を臨床現場に応用したものです。平川和子さん（東京フェミニストセラピーセンター所長）からうかがったそのポイントは、一人ひとりの《生きにくさ》を「支配的な物語の組み替え」という仕方で克服するところにあります。

人間というのは生きにくさが昂じると死んでしまうので、何とか生き延びるため

のストーリーをひねり出す。これを「支配的な物語」（ドミナント・ストーリー）と呼びます。たとえば「自分は誰にもわかってもらえない」とか「頑張らないとバカにされる」、「生まれてこない方がよかったんだ」とかいった思い込みがそれです。こうした物語は本人の生きられた経験を捉え切っていません。でもその人を強く支配し、振り回してしまう。セラピーを続けていくと、この「支配的な物語」を再構成し、語り直し、「もう一つの物語」（オルタナティブ・ストーリー）を自分で見出すターニングポイントに突き当たるものだそうです。その機会を逃さず「もう一つの物語」を聞き出すのがセラピストの役目に他なりません。その題材としては少女漫画と児童文学がしばしば引き合いに出されます。平川さんのもとに来た20代後半の女性のケースですと、萩尾望都さんの漫画『イグアナの娘』を読んで、「私は『イグアナの娘』だったんだ」と過去形で語れるようになる——これが「もう一つの物語」への第一歩です。

平川さんによれば「フェミニストセラピーを通じた癒しへの入り口」には、五段階があります。第一に「人の輪に入る」こと。第二に、そこで「自己主張すること」。第三に、自己主張した後、誤解や無視にあっても挫けないで「ひとりで行ける力を身につけること」。第四に、「自分の置かれた立場をよく知ること」。ここでAC等の用語が自己対象化に役立つこともあるそうです。そして最後に、同じような「生きにくさ」を抱えた仲間との「自助グループ」に参加することもできる。以上の五つのステップを踏んで、だんだんと《生きにくさ》のケアが進んでいくのです。

現実の社会に倫理学をどう生かすか インタビューの終わりでは「倫理学を現代社会にどう役立てることができるのか」という難問を突きつけられました。もちろんこの「臨床哲学」もその課題を担おうとするムーヴメントなのですが、私はとりあえずカントも関与した「啓蒙」の運動やフーコーが哲学の使命とした「今とは違ったやり方で考えること」を倫理学の中で実践したい、と答えておきました。そうした観点から再び現代の《生きにくさ》に立ち向かうとすれば何が言えるでしょうか。「現代の運命に男らしく堪えろ」というウェーバーのアドバイスは、もはや失効しています。ジェンダー・バイアスを脱却した代替策として、「楽しく堪えよう」というのはいかなるものなのでしょうか。これがどれほど有効かは皆さんにそれぞれ試してもらおうとしても、マクロな時代診断は私の任ではありません。倫理学と現代社会の関わりを問おうとするさまざまな模索的な試みを孤立させず、その間を

ネットワーキングしていく作業が私の使命だと思い定めています。

【付記】本文は、臨床哲学研究会シンポジウム(1997年2月21日、大阪大学待兼山会館)における私の発題要旨に一部加筆したものである。テープ起こしを担当された紀平知樹氏を始めとする本シンポ関係者にお礼申し上げますと共に、「あんた、ホンマに《生きにくさ》を感じてるんかい？」などと会場で鋭い質問を浴びせて下さった皆さん方に感謝したい。当日は仕上げにかかっていた拙著『ロールズ：正義の原理』（講談社）の初校・新規原稿を講談社の夜間受付に託し、ほとんど徹夜で新幹線に乗った記憶がある。じゅうぶんな準備も無しに『世界』インタビューを配布して、何とか発題者の責めを果たし終えた（つもりだった）。いつもながら終了後の懇親会、二次会はほんとうに楽しい時間だった。翌朝積もっていた雪の美しさも、今回の出張に花を添えてくれた。実は拙著の公刊と時を同じくして、東北大学文学部に新設された「生命環境倫理学」を担当することになった。本研究会との連携がますます必要とされるポジションである。文部省にも公式に認知されたという「臨床哲学」の活動に今後とも熱い視線を寄せ続けたい。